

巻頭言「学ぶ教師」

小田原市教育研究所長 石井 政道

児童生徒一人 1 台の学習用端末が配付され、今年度からは本格的に授業や学校行事等で活用が図られるようになりました。学校訪問では校長先生から学校運営の様子に加えて学習用端末の活用等について話を聞かせていただき、学校や教師の責任と役割について改めて考え直す機会となりました。

教師は教育に関する研究や事例に止まることなく、法律等までも学び、新たな教育制度や方策を学校やクラスに導入し、児童生徒の指導に直接活かしていかなければなりません。まさに児童生徒に毎日向き合いながら新鮮な教育を提供することこそが、教師ならではの仕事であると言えます。

教師が日々新たな情報や広い知識を学び続けながら実践していくことの大変さは、私自身のこれまでの経験からも理解できます。しかし学びの窓口である教師には「それはできません」「まだ知りません」は許されず、「担当が違います」といった対応もできません。そこで先生方には、広く知識を得ていこうとする意識と、実際に積極的に対応していこうとする態度が求められています。また、ここ数年仕事の分業化が進み便利なことも多くなりましたが、その分仕事上の横のつながりや情報連携が希薄になりがちであることも事実です。その希薄さを補う意味からも、放課後有志を中心に様々なスタイルで勉強会を行っている学校も多くあるようです。

児童生徒一人 1 台の学習用端末が実現した現在、児童生徒を目の前にしている専門家としての教師自らも「覗いてみる」「聞いてみる」「触れてみる」という主体的な意識をもって、広く・深く・じっくりと学び続け、日々新たな教育活動に対応していける力量を身に付けていってほしいと考えています。

研究所便り「教師の学びも止めない」～おだわら未来学舎～ 教育指導課 柴田典子指導主事

コロナ禍、ICT の活用、中学校の新学習指導要領の全面实施…様々な対応に追われ、学校現場の不安も大きいのではないのでしょうか。本市では、そうした不安の中で、「どうしていったらよいのか？」という現状の課題が少しでも解消に向かうよう、先生方のニーズに応じたテーマを設定し、今年度の「おだわら未来学舎」を実施しています。

「ギガ・スクール」がやってくる・・・でもあわてない
「授業の質」を問い直す

＜講師 小林 宏己 先生（早稲田大学教授）＞



GIGA スクール構想が始まっても、教育の本質は変わらない。子どもと共に創る授業のツールとして活用を！

第 1 回

会場とオンライン
を併用しました。

Zoom による
全面オンラインで
実施しました。約 60 名の参加がありました。

第 2 回



まずは、どんな実践があるのか共有し、教師自身がどんどん使ってみることが大切です。

GIGA スクールははじめの一歩

「個別最適化」と「協働的な学び」について考える
＜講師 小林 祐一 先生（東京未来大学准教授）＞

今後も、開催方法を工夫しながら、「おだわら未来学舎」を実施していきます。

小さなころみ「共同研究」

芦子小学校 中野加弥子総括教諭（研究委員長）

「ICTを活用した個別最適な学びに関する研究」 柳下仁志（酒匂中） 西垣亮（白山中） 曾我洋王（下中小） 稲葉みなみ（富士見小）

「ICTを活用した協働的な学びに関する研究」 中野加弥子（芦子小） 山崎克洋（足柄小） 幾田遼（国府津中） 西山佳実（千代中）

1 研究の目的

一人1台の学習端末環境が整いました。みなさんは今日までにどのような場面で、どのくらいICTを活用してきていますか。「指導者が使用方法を理解しないと…」「まずルールを決めないと…」「使用方法を指導するのに時間がかかる…」などの悩みに、二の足を踏んでしまうこともあるかと思えます。この研究は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の視点からICTを活用した教育のよりよいあり方を探り、その成果を市内小中学校に広めることが目的です。「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた指導の工夫の一つとしてICTを活用する」研究です。2年間の研究で積極的にICTを活用し、子どもたちの学びに効果的な使用場面・方法を探り、みなさんにお伝えしていきます。

2 研究の流れ

テーマについてイメージの共有を図ることから研究が始まりました。これまでの指導方法からICTに置き換えられる場面を考えたり、ICTを活用した事例を集めたりしてきています。また、協議の中から得られた仮説をもとに授業実践を行いました。7月の授業では、子どもたちがクロームブックの画面を具体的に示しながら自分の考えを伝える姿や、自信をもって話し合いに参加している姿が見られました。自分なりの根拠をしっかりとって課題解決に当たっている子どもたちが、これまで以上に多かったように感じました。このような姿が、市内の小中学校に広がっていくことを願っています。



ある教室から「子どもが輝く教室に…」

教育指導課 津田裕子指導主事

ある幼稚園の年長さんのクラスでは、「遠足で何をして遊ぶか」について話し合っていました。「リレーとかいいんじゃない？」「私は、なわとびがいいな。」「じゃあ、短いなわとびをリュックに入れて持っていく？」・・・園児たちは、これまで、園内で行った楽しい遊びの経験や、先生が伝えた遠足で行く場所の情報などから、どんな遊びがよいか真剣に考えています。ワクワクしている気持ちが、表情や言葉から伝わってきます。

また、ある小学校の5年生のクラスでは、算数の時間に小数×小数の計算の仕方を考えていました。授業のはじめに「全然わからない…」とつぶやいていたAさん。これまでの学習を振り返ったり、友だちの考えを聞いたりしながら、問題と向き合っていました。その後、グループで考え方を交流する時間になると「小数×小数を、整数×整数にしてね、でね、でね・・・」と嬉しそうに友だちに説明するAさんの姿がありました。納得できる方法が見つかったようです。

幼稚園、小学校、中学校とそれぞれの発達段階に応じて、当然内容は異なりますが、子どもたちが「よりよくしたい」「追究したい」という思いを膨らませながら学んでいる姿にたくさん出会います。そして、そこには、先生の問いかけや教材、題材との出会わせ方、これまでの学びの積み重ねなど、ていねいな子どもの見取りと、計画的な指導が必ずあります。

学習指導要領では、幼稚園から高等学校まで、育てたい資質・能力が3つの柱で整理されています。同じ目標に向かって、それぞれの教室で、学びの探究心が刺激される楽しい遊びや楽しい授業が展開され、これからも子どもたちの輝く表情がたくさん見られることを願っています。